

プ ラ ザ

東京医科大学臨床漢方セミナーのご紹介  
Introduction of a series of Kampo medical seminar in Tokyo Medical University

及川哲郎<sup>1)2)※</sup> 矢数芳英<sup>1)3)※</sup> 渡邊秀裕<sup>1)4)</sup>  
伊藤正裕<sup>1)5)</sup> 土田明彦<sup>6)</sup> 新妻知行<sup>7)8)</sup>  
山田仁三<sup>7)9)</sup>

Tetsuro OIKAWA<sup>1)2)</sup>, Yoshihide YAKAZU<sup>1)3)</sup>, Hidehiro WATANABE<sup>1)4)</sup>,  
Masahiro ITOH<sup>1)5)</sup>, Akihiko TSUCHIDA<sup>6)</sup>, Tomoyuki NIITSUMA<sup>7)8)</sup>,  
Jinzo YAMADA<sup>7)9)</sup>

<sup>1)</sup>東京医科大学病院漢方医学センター

<sup>2)</sup>東京医科大学病院総合診療科

<sup>3)</sup>東京医科大学病院麻酔科

<sup>4)</sup>東京医科大学病院感染症科

<sup>5)</sup>東京医科大学人体構造学分野

<sup>6)</sup>東京医科大学消化器・小児外科学分野

<sup>7)</sup>東京医科大学

<sup>8)</sup>戸田中央総合病院内科

<sup>9)</sup>柏崎厚生病院精神科

はじめに

本学には、2006年より開催されている「東京医科大学臨床漢方セミナー(以下、本セミナーと省略)」という学内有志の勉強会がある。その後2014年4月には本セミナーを礎として、当時の東京医科大学病院長であった土田明彦(共著者)と人体構造学分野の伊藤正裕(共著者)が中心となり、東京医科大学漢方研究会(以下、本研究会と省略)の立ち上げへと発展した。以降、本研究会は学内における漢方医学の診療・教育・研究振興を目的として、さまざまな活動を行っている。

このたび2019年9月に、本セミナーの開催回数が100回を数えるに至った。そこで、この機会をとらえてこれまでの活動を振り返り、あわせて読者の皆様に本セミナーを中心とした我々の活動をご紹介したい。

臨床漢方セミナーの開催目的と発足の経緯

解剖学第二講座の主任教授であった山田仁三(共著者)が発起人となり、2005年12月20日に本セミナーの打ち合わせ会が行われ、今後の方針と開催目的が話し合われた。この背景として、当時国内で医師の約8割が漢方薬を治療に使用しているとの調

令和2年8月3日受付、令和2年8月24日受理

※本論文に関する及川哲郎と矢数芳英の貢献は等しいものである

キーワード: 漢方診療、漢方医学教育

(別冊請求先: 〒160-0022 東京都新宿区西新宿6-7-1 東京医科大学病院総合診療科・漢方医学センター 及川哲郎)

TEL: 03-3342-6111 (内線2152) FAX: 03-3349-6052 E-mail: oikawa-t@tokyo-med.ac.jp

査がある一方、都内に13ある大学医学部・医科大学のなかで、漢方外来が開設されていないのは本学のみであるという大変残念な現状があった。

そこで本学における漢方医学の裾野を広げること、さらに臨床現場で漢方を使い治療手段を拡げることが目的とし、院内における新たな漢方セミナーの立ち上げについてディスカッションがなされた。その結果、漢方セミナーを行うことで院内への十分な周知を図ったうえ、はじめに達成すべきゴールは何より、「本学に漢方外来を設立すること」で意見の一致をみた。

そして2006年4月28日に最初の東京医科大学臨床漢方セミナーが開催された。その後、院内における漢方の啓発がはかられたことを受けて、2007年11月より総合診療科内に「漢方外来」が開設され、現在に至っている。

#### 臨床漢方セミナーのこれまでの内容等について

当初、本セミナーは、旧東京医科大学医局センター5階、第1ゼミナール室にて開催されていた。その後、参加者が増加したため、第17回の本セミナー（2008年2月29日）より旧東京医科大学病院6階第3会議室に会場が変更された。2019年7月に第99回の本セミナーが新病院9階会議室で行われるまで、おおむね開催場所は上記で固定された。

第1回の本セミナー前半はアレルギー（喘息）内科の新妻知行（共著者）による「咳と喘息の漢方治療」、後半は麻酔科の矢数芳英（共著者）による「かぜ症候群の漢方治療パートI」であった。座長は山田仁三（共著者）が務めた。当時の参加者名簿をふりかえると、アレルギー内科、リウマチ膠原病内科、糖尿病内分泌内科、耳鼻咽喉科、メンタルヘルス科、臨床検査科、麻酔科、皮膚科、小児科、形成外科、老年科（現：高齢診療科）、口腔外科などの診療科に加えて、解剖学教室、薬剤部など多岐にわたる先生方がセミナーに参加されていた。開催回数を重ねるに伴い、各科臨床医のみならず、地域の開業医、大学院生なども参加するようになった。（図1）

その後も、おおむね表1に示す日時内容のごとく、本セミナーは途切れることなく開催されてきた。大学病院で行われる漢方セミナーらしく、国際雑誌に掲載された漢方関連文献紹介が毎回継続的に行われたことは特筆される。もちろん、漢方医学的な理論や用語、漢方処方等に関する解説も毎回行われてお



図1 臨床漢方セミナーの講義風景

り、参加者からすると漢方に関連する東洋医学、西洋医学両面からの知識、研究知見を一気に吸収できるまたとない機会となっていたと想像できる。

表2に本セミナーと本研究会の年表を示した。これまで約15年の活動の中で、本セミナーが本学の中に根付き100回の開催を数えることができたのには、参加者のすそ野を広げるいくつかの契機があったと考えられる。まず2016年以降、東京医科大学病院の初期研修医は本セミナーへの参加が必須となった。2年間の研修中最低1回という条件ではあるが、研修医に対して出席義務を課したことで、研修医が西洋医学の研修を中心に行いながらも漢方医学に接する時間が保証された。西洋医学で治療に行き詰ったときに、自身で的確に漢方薬を選択できるかどうかはともかく、とりあえず漢方医学という別の手もあると想起できることは重要と考えられる。その意味で、多忙な初期研修中に本セミナーに出席する機会があるとないとでは、大きな違いがあると推察される。

続いて、2017年に本セミナーが東京医科大学大学院の特別講義のひとつと認定されたことがあげられる。このことで、本学大学院生の中でも漢方医学に興味を持つ者が、単位の取得を兼ねて気軽に参加・聴講できるようになった。さらに2018年より、本セミナーは東京都医師会生涯教育講座のひとつとして認定された。元々本学は、新宿区内をはじめとした地域の開業医の先生方と連携を密にしてきたところではあるが、東京都医師会生涯教育講座の単位取得が可能になったことで、漢方医学に興味をもつ地域の先生方が少しずつではあるが参加・聴講するようになり、本学の病診連携の一翼を担うようになっ

表1 臨床漢方セミナー各回の内容・講師の一覧表(敬称略)

回数	開催日	座長	症例提示、処方解説など	講師	症例提示など	講師	講義	講師
02006年 (H18)	4月28日		漢方医学の教育・臨床・研究について	山田仁三 (解剖学)				
1	5月26日	山田仁三 (解剖学)	咳と喘息の漢方治療	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			かぜ症候群の漢方治療パートI	矢数芳英 (麻酔科)
2	6月30日	山田仁三 (解剖学)	喘息・咳の症例提示	額賀優江 (アレルギー(喘息) 内科)			呼吸器疾患における漢方治療 うるおす薬麦門冬湯	矢数芳英 (麻酔科)
3	7月28日	山田仁三 (解剖学)					かぜ症候群の漢方治療パートII 脾胃(胃腸)を元気にする補中益気湯	矢数芳英 (麻酔科)
4	9月29日	山田仁三 (解剖学)	咽喉頭異常感に対する半夏厚朴湯の効果	湯川久美子 (耳鼻咽喉科)			耳鼻咽喉科領域における漢方療法	矢数芳英 (麻酔科)
5	11月24日	山田仁三 (解剖学)	口腔外科領域における漢方治療	伊能智明 (口腔外科)			白虎湯と石膏関連方剤 中国伝統医学の概要 虚証(総論)	矢数芳英 (麻酔科)
62007年 (H19)	1月26日	山田仁三 (解剖学)	LPRD治療における六君子湯の有用性	渡嘉敷亮二 (耳鼻咽喉科)			補気剤について 六君子湯と関連方剤	矢数芳英 (麻酔科)
7	2月23日	山田仁三 (解剖学)	多汗症と防己黄耆湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			虚実(総論) 虚証(総論) 気虚証と四君子湯・補中益気湯	矢数芳英 (麻酔科)
8	3月30日	山田仁三 (解剖学)	アレルギー性鼻炎における小青竜湯の効果	湯川久美子 (耳鼻咽喉科)			EBM漢方によるアレルギー性鼻炎の治療	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)
9	4月27日	山田仁三 (解剖学)	東京医科大学病院における漢方製剤の使用状況	中村薫 (薬剤部)			使用頻度の高い方剤芍薬甘草湯 血虚証と四物湯・十全大補湯	矢数芳英 (麻酔科)
10	5月25日	山田仁三 (解剖学)	呼吸器疾患に対する麦門冬湯の位置づけ	森田園子 (アレルギー(喘息) 内科)			陰虚証と六味地黄丸・麦門冬湯	矢数芳英 (麻酔科)
11	6月22日	山田仁三 (解剖学)					陽虚証と八味地黄丸・人參湯	矢数芳英 (麻酔科)
12	7月27日	山田仁三 (解剖学)					風の病証/治風法と桂枝湯・釣藤散・当帰飲子	矢数芳英 (麻酔科)
13	9月28日	山田仁三 (解剖学)					火熱の病証/白虎湯・黄連解毒湯・竜胆瀉肝湯	矢数芳英 (麻酔科)
14	10月26日	山田仁三 (解剖学)					湿の病証/去湿法と平胃散・五苓散・茵陳蒿湯・苓桂朮甘湯	矢数芳英 (麻酔科)
15	11月30日	山田仁三 (解剖学)	抑肝散が効果的であった症例	平田文乃 (老年病科)			怒りを静める抑肝散/ 抑肝散とその応用	矢数芳英 (麻酔科)
162008年 (H20)	1月25日	山田仁三 (解剖学)					瘀血の病証/活血化瘀法と桂枝茯苓丸・桃核承気湯	矢数芳英 (麻酔科)
17	2月29日	山田仁三 (解剖学)	アレルギー性鼻炎に対する小青竜湯の効果	湯川久美子 (耳鼻咽喉科)			温めて水をのぞく小青竜湯/ 花粉症の漢方	矢数芳英 (麻酔科)
18	3月28日	山田仁三 (解剖学)					大建中湯とはどんな薬なのか? 漢方薬の注意すべき副作用	矢数芳英 (麻酔科)
19	4月25日	山田仁三 (解剖学)					下痢の漢方治療/ 過敏腸症候群を中心に	矢数芳英 (麻酔科)
20	5月30日	山田仁三 (解剖学)					関節痛の漢方治療/ 防己黄耆湯を中心に	矢数芳英 (麻酔科)
21	6月20日	山田仁三 (解剖学)	めまい・立ちくらみの漢方療法	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			めまいに用いる漢方薬/ 苓桂朮甘湯	矢数芳英 (麻酔科)
22	8月22日	山田仁三 (解剖学)	慢性咳嗽の対応	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			慢性咳嗽の漢方療法	矢数芳英 (麻酔科)
23	10月24日	山田仁三 (解剖学)					(方剂学) 気の病態/気虚に使う方剤	矢数芳英 (麻酔科)
24	11月28日	山田仁三 (解剖学)					気の病態/気滞に使う方剤	矢数芳英 (麻酔科)
252009年 (H21)	1月30日	山田仁三 (解剖学)					血の病態/血虚に使う方剤	矢数芳英 (麻酔科)
26	2月20日	山田仁三 (解剖学)					血の病態/血瘀に使う方剤	矢数芳英 (麻酔科)
27	3月27日	山田仁三 (解剖学)					水の病態/水滞に使う方剤	矢数芳英 (麻酔科)
28	5月1日	山田仁三 (解剖学)					(臨床に即した漢方治療) 「便秘」に使う漢方薬	矢数芳英 (麻酔科)
29	5月29日	山田仁三 (解剖学)					「冷え」に使う漢方薬	矢数芳英 (麻酔科)
30	6月26日	山田仁三 (解剖学)	(国際雑誌に掲載された漢方関連文献紹介) 六君子湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			漢方薬の副作用	矢数芳英 (麻酔科)
31	7月31日	山田仁三 (解剖学)	抑肝散	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「怒り」をしずめる抑肝散	矢数芳英 (麻酔科)
32	9月18日	山田仁三 (解剖学)	大建中湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「大建中湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
33	10月23日	山田仁三 (解剖学)	麻黄湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「麻黄湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
34	11月27日	山田仁三 (解剖学)	牛車腎気丸	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「牛車腎気丸」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
352010年 (H22)	1月29日	山田仁三 (解剖学)	芍薬甘草湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「芍薬甘草湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
36	2月26日	山田仁三 (解剖学)	補中益気湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「補中益気湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)

回数	開催日	座長	症例提示、処方解説など	講師	症例提示など	講師	講義	講師
37	3月26日	山田仁三 (解剖学)	六君子湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「六君子湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
38	4月23日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	麦門冬湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「麦門冬湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
39	5月28日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	半夏厚朴湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「半夏厚朴湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
40	6月25日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	温経湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「温経湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
41	7月30日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	加味逍遙散	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「加味逍遙散」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
42	9月17日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	当帰芍薬散	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「当帰芍薬散」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
43	10月29日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	桂枝茯苓丸	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「桂枝茯苓丸」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
44	11月26日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	柴胡桂枝乾姜湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「柴胡桂枝乾姜湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
45	2011年 (H23)	1月21日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	十全大補湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)		「十全大補湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
46	2月25日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	桂枝加芍薬湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「桂枝加芍薬湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
47	4月22日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	半夏瀉心湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「半夏瀉心湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
48	5月27日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	五苓散	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「五苓散」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
49	6月24日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	呉茱萸湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「呉茱萸湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
50	7月27日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	釣藤散	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「釣藤散」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
51	10月28日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	黄連解毒湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「黄連解毒湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
52	2012年 (H24)	1月27日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	麦門冬湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)		「麦門冬湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
53	2月24日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	小青竜湯	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「小青竜湯」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
54	3月30日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	当帰芍薬散・加味逍遙散・桂枝茯苓丸	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)			「婦人科3大処方」とはどんな漢方薬か?	矢数芳英 (麻酔科)
55	4月21日	新妻知行 (アレルギー(喘息) 内科)	(症例提示) 高齢者・認知機能低下の周辺 症状に対する効果	高崎朗 (老年病科)			「怒り」をしずめる抑肝散	矢数芳英 (麻酔科)
56	5月31日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 六君子湯を実際使ってみて	遠藤光史 (消化器・小児外科)			六君子湯とその鑑別	矢数芳英 (麻酔科)
57	6月21日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 高齢者の諸症、LOH症候群への 処方経験	高崎朗 (老年病科)			八味地黄丸と牛車腎気丸について	矢数芳英 (麻酔科)
58	7月26日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 大建中湯の臨床/症例提示	遠藤光史 (消化器・小児外科)			おなかを温める大建中湯の使い方	矢数芳英 (麻酔科)
59	9月27日	伊藤正裕 (人体構造学)					漢方薬の副作用	矢数芳英 (麻酔科)
60	10月25日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 五苓散による口内炎の治療例	安田卓史 (歯科口腔外科・矯正歯科)			五苓散の臨床応用について	矢数芳英 (麻酔科)
61	11月29日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 便秘の漢方自験例～#126. 麻子仁丸	遠藤光史 (消化器・小児外科)			便秘の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
62	2013年 (H25)	1月31日	伊藤正裕 (人体構造学)				インフルエンザの漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)

回数	開催日	座長	症例提示、処方解説など	講師	症例提示など	講師	講義	講師
63	2月28日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 花粉症の自験例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			漢方の花粉症治療	矢数芳英 (麻酔科)
64	3月21日	伊藤正裕 (人体構造学)	半夏厚朴湯の使用経験	遠藤光史 (消化器・小児外科)	繰り返し誤嚥性肺炎に対する 半夏厚朴湯の予防効果	高崎朗 (老年病科)	半夏厚朴湯	矢数芳英 (麻酔科)
65	5月16日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 頭痛の2症例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			典型例から考える頭痛の漢方 治療	矢数芳英 (麻酔科)
66	7月25日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 六君子湯を実際に使ってみて	遠藤光史 (消化器・小児外科)			消化器疾患(上部消化管)の 漢方薬	矢数芳英 (麻酔科)
67 2014年 (H26)	1月31日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 様々な下痢に対する漢方の使用 例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			4つの生薬から考える下痢の 漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
68	3月20日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 泌尿器科領域で用いる漢方	濱田理宇 (泌尿器科)			頻尿の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
69	5月29日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 前立腺癌末期の腰痛の1症例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			腰下肢痛の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
70	7月18日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 麻黄による副作用発症の1症 例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			頻度と重症度から副作用を考 える	矢数芳英 (麻酔科)
71	9月25日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 咳の漢方—症例提示—	遠藤光史 (消化器・小児外科)			慢性咳嗽に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
72	11月13日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 繰り返し咽頭扁桃炎に対してい る漢方処方の一症例	高崎朗 (老年病科)			葛根湯・麻黄湯が効くメカニ ズムとは?	矢数芳英 (麻酔科)
73 2015年 (H27)	1月19日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 花粉症(小青竜湯投与例)の 症例提示	遠藤光史 (消化器・小児外科)			「小青竜湯」とはどんな漢方薬 か?	矢数芳英 (麻酔科)
74	3月12日	伊藤正裕 (人体構造学)	(症例提示) 漢方を用いた便秘の症例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			便秘の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
75	5月21日	伊藤正裕 (人体構造学)	漢方を用いた頭痛の症例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			頭痛の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
76	7月30日	伊藤正裕 (人体構造学)	更年期障害を更年期症状に変 える漢方薬	佐野陽子 (東京衛生病院)			女性疾患に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
77	9月24日	伊藤正裕 (人体構造学)	不安障害・不眠に対して漢方 薬併用が有効であった症例	高崎朗 (老年病科)			不安神経症・不眠に対する漢 方治療	矢数芳英 (麻酔科)
78	11月26日	伊藤正裕 (人体構造学)	慢性胃炎・腹痛の漢方症例— 六君子湯を中心に—	遠藤光史 (消化器・小児外科)			慢性胃炎・腹痛に対する漢方 治療	矢数芳英 (麻酔科)
79 2016年 (H28)	1月21日	伊藤正裕 (人体構造学)	様々な下痢に対する漢方使用 例	遠藤光史 (消化器・小児外科)			下痢に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
80	3月17日	伊藤正裕 (人体構造学)	泌尿器科領域で用いる漢方	濱田理宇 (泌尿器科)			排尿障害に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
81	5月12日	伊藤正裕 (人体構造学)	腰痛の漢方使用症例	遠藤光史 (緩和医療部)			腰痛に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
82	7月21日	伊藤正裕 (人体構造学)	麻黄の副作用	遠藤光史 (緩和医療部)	地黄の副作用	下村貴子 (産科・婦人科)	漢方の副作用	矢数芳英 (麻酔科)
83	9月15日	伊藤正裕 (人体構造学)	癌性胸膜炎による2症例と癌 性リンパ管症による咳の症例	遠藤光史 (緩和医療部)	外来診療における咳の3症例	山口佳子 (総合診療科)	咳に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
84	11月17日	伊藤正裕 (人体構造学)	急性上気道炎に漢方が著効し た2症例 (小柴胡湯加桔梗石膏、麻黄湯)	下村貴子 (産科・婦人科)	乳児の高熱に対する漢方治療 (麻黄湯の使用経験)	屋良美紀 (麻酔科)	急性上気道炎に対する漢方治 療	矢数芳英 (麻酔科)
85 2017年 (H29)	1月19日	伊藤正裕 (人体構造学)	アレルギー性鼻炎の漢方症例	遠藤光史 (緩和医療部)			アレルギー性鼻炎に対する漢 方治療	矢数芳英 (麻酔科)
86	3月16日	伊藤正裕 (人体構造学)	便秘に対する漢方使用症例	遠藤光史 (緩和医療部)			便秘の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
87	5月18日	伊藤正裕 (人体構造学)	漢方を用いた頭痛の症例— 一脳腫瘍に対する五苓散使用 例を中心に—	遠藤光史 (緩和医療部)	硬膜穿刺および腰椎麻酔後頭 痛の漢方薬治療	佐野陽子 (東京衛生病院)	頭痛の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
88	7月13日	伊藤正裕 (人体構造学)	内科外来で漢方治療を行った 女性疾患症例	一木昭人 (臨床検査医学科)	女性疾患での漢方投与症例	遠藤光史 (緩和医療部)	女性疾患に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
中止	9月21日	伊藤正裕 (人体構造学)					不安神経症・不眠に対する漢 方治療	矢数芳英 (麻酔科)
89	11月16日	伊藤正裕 (人体構造学)	内科外来で漢方治療をおこ なった消化器症例	一木昭人 (臨床検査医学科)	慢性胃炎・腹痛の漢方症例	遠藤光史 (緩和医療部)	慢性胃炎・腹痛に対する漢方 治療	矢数芳英 (麻酔科)
90 2018年 (H30)	1月25日	伊藤正裕 (人体構造学)	内科外来で漢方を用いた消化 器症例(下痢症状)	一木昭人 (臨床検査医学科)	下痢に対する漢方使用例	遠藤光史 (緩和医療部)	下痢に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
91	3月15日	伊藤正裕 (人体構造学)					排尿障害に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
92	5月24日	伊藤正裕 (人体構造学)	腰痛の漢方使用症例	遠藤光史 (緩和医療部)			腰痛に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
93	7月28日	伊藤正裕 (人体構造学)	麻黄による副作用症例	遠藤光史 (緩和医療部)			漢方の副作用	矢数芳英 (麻酔科)

回数	開催日	座長	症例提示、処方解説など	講師	症例提示など	講師	講義	講師
94	9月20日	伊藤正裕 (人体構造学)	咳への漢方使用例—癌性胸膜炎への使用を含めて—	遠藤光史 (緩和医療部)	外来診療における咳の3症例	山口佳子 (総合診療科)	咳に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
95	11月15日	伊藤正裕 (人体構造学)	乳児の高熱に対する漢方治療 (麻黄湯の使用経験)	屋良美紀 (麻酔科)	漢方を投与した急性上気道炎症例	遠藤光史 (緩和医療部)	急性上気道炎に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
96	2019年(R1)	1月17日	伊藤正裕 (人体構造学)	アレルギー性鼻炎の漢方症例	遠藤光史 (緩和医療部)		アレルギー性鼻炎に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
97	3月14日	伊藤正裕 (人体構造学)	便秘に対する漢方の使用例	遠藤光史 (緩和医療部)	内科診療で漢方治療を行った便秘症例	一木昭人 (臨床検査医学科)	便秘の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
98	5月16日	伊藤正裕 (人体構造学)	漢方を用いた頭痛の症例	遠藤光史 (緩和医療部)	内科診療で漢方治療を行った頭痛症例	一木昭人 (臨床検査医学科)	頭痛の漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
99	7月25日	伊藤正裕 (人体構造学)	漢方を用いた女性疾患の症例	遠藤光史 (緩和医療部)	婦人科外来における症例/ 産婦人科における漢方の頻用処方	班目有加(産科・婦人科)/ 佐野陽子(東京衛生病院)	女性疾患に対する漢方治療	矢数芳英 (麻酔科)
100	9月19日	伊藤正裕 (人体構造学)	半夏厚朴湯と香蘇散の使い方 (講演)	及川哲郎 (総合診療科・漢方医学センター)	「不安・不眠・動悸に対する漢方治療— 総合診療科より紹介された症例の検討」(講演)	矢数芳英 (麻酔科・漢方医学センター)		

表2 臨床漢方セミナーと漢方研究会の年表

年月	主な出来事
2006年 4月	東京医科大学臨床漢方セミナー(以下、本セミナー)開始
2007年 11月	東京医科大学病院総合診療科内に漢方外来が開設される
2009年 6月	本セミナーが下記の発表形式となる 前半 漢方薬のエビデンスや作用機序の解説、後半 漢方医学的講義
2012年 5月	本セミナーが下記の発表形式となる 前半 各回のテーマに合った症例報告、後半 漢方医学的講義
2014年 1月	本セミナーが隔月開催に変更となる
2014年 4月	学内有志団体としての東京医科大学漢方研究会が設置される (事務局 東京医科大学人体構造学分野)
2016年 4月	東京医科大学病院の初期研修医は本セミナー参加が必須となる (2年間の研修中1回以上)
2017年 5月	本セミナーが東京医科大学大学院特別講義のひとつと認定される
2018年 1月	本セミナーが東京都医師会生涯教育講座のひとつと認定される
2019年 7月	新病院開院 東京医科大学病院漢方医学センターが開設される
2019年 9月	第100回の本セミナーが開催される
2020年 6月	漢方カンファレンスが開始となる
2020年 7月	東京医科大学病院漢方医学センター開設1周年

たことは喜ばしい。

このように、本セミナーを育てる機会を設けていただいた関係の諸先生方には、この場を借りて謝意を表したい。

2011年までの本セミナーは専門家による講義や解説が中心だったが、2012年以降は漢方医学に興味を持つ若手の先生方の症例発表の場も兼ねるよう

になった。その日解説される漢方処方あるいはその日のテーマとなる病態に合わせて、漢方薬で治療して有効性の認められた症例を漢方医学研修中の数名の先生方に発表していただいております、これは現在も継続して行われている。東京医科大学病院は、漢方専門医制度の研修指導施設として日本東洋医学会から認定されている。彼らの発表症例は、自身の漢方専門医取得のために必要な症例報告に利用されたり、特に優れた症例報告はその後学会でも発表されるなど、漢方医学教育と研究の両面から意義のあるものとなっている。

### 臨床漢方セミナーを中心とした漢方医学教育 啓発活動の今後

2019年7月、待望の東京医科大学新病院がオープンした。それに合わせて、総合診療科の中に漢方医学センターが新規開設された。前述のように旧病院内に漢方外来が開設され、矢数芳英を中心として着々と診療教育研究に成果を上げてきたところであるが、この成果をさらに強化し本学の特徴のひとつとするため、センター化することでより多くの漢方医学の専門家の結集をはかることとしたものである。感染症科からは渡邊秀裕が、人体構造学分野からは伊藤正裕(兼務発令は2020年1月)が参画、そして北里大学東洋医学総合研究所から及川哲郎がセンター長として着任した。以下に、本セミナーを中心とした漢方医学教育啓発活動の今後について展望する。

漢方医学センター開設後まだ日は浅いが、矢数と及川が中心となり、本セミナーにおいてもすでに新しい試みが行われつつある。ひとつは、各科の新しい

い先生方への講師依頼である。2020年の本セミナー開催予定回数はこれまで通り年6回であるが、今後は各回のテーマに合わせてその分野で漢方医学を研修中の若手の先生方にも講師をお願いすることになっている。理由のひとつとして、若手の先生方もだいたい実力をつけてきたことがあげられる。そして、人に教えることが自身の漢方医学の実力を高める良い機会と考えられるからである。このような機会を増やすことを考慮し、2021年以降は本セミナーの回数を増やしていくことも検討している。本セミナーで講師を務める本学OBOGの先生方の中から、将来の漢方医学センターの中心を担う人材が出てくることを期待したい。

また2020年6月以降、本セミナーにも連動する形で漢方カンファレンスが開始となった。本セミナーに参加している漢方医学センター所属の医師、漢方医学研修中の専攻医、そのほか漢方医学に興味を持つ学内の医師が参加し、毎週の初診患者の報告、治療に難渋している症例の相談、さらに書籍の読み合わせを行っている。現時点では毎週火曜日18時より自主自学館内の会議室(原則801会議室)で行っているため、興味を持った読者の先生方はお問合せ願いたい。

本セミナーと連動した研修医教育にも、これまで以上に積極的に取り組んでいきたいと考える。現在総合診療科をローテーションしてくる研修医には、全員に90分程度の漢方医学講義(総論と各臨床領域における漢方薬の使い方)を行っている。研修医が知っておくべき漢方医学の知識習得が第一だが、彼らが漢方医学に興味を持ってもらうためのいわば呼び水の意味も兼ねており、興味をもった研修医には本セミナーへの積極的参加を呼び掛けるようにしている。最近では、本セミナー中に香蘇散など香りのよい煎じ薬の実演や試飲も行っている。このような「仕掛け」も徐々に増やし、こうしたほんものの漢方薬を体験することが漢方医学や漢方薬を身近に感じる契機になればよいと考えている。

先述のように、東京医科大学病院は漢方専門医制度の研修指導施設として、質の高い多くの漢方専門医を育成する使命がある。その中で、本セミナーの役割は今後も本学における漢方医学教育啓発活動の中心であり続けると予想される(図2に、臨床漢方

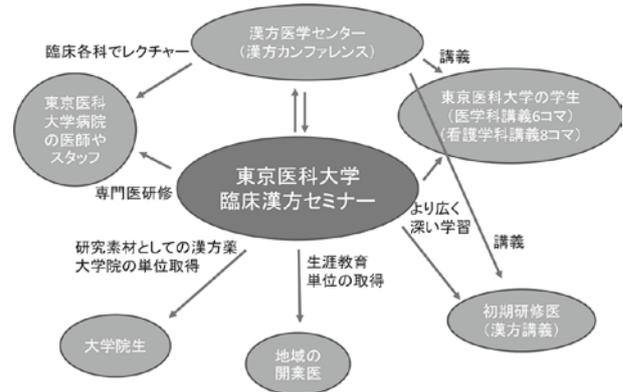


図2 臨床漢方セミナーを中心とした本学で行われている漢方医学教育等のイメージ

セミナーを中心とした、本学で行われている漢方医学教育啓発活動のイメージをまとめた)。その一番の理由は、外部の先生方を含めた多種多様な目的を持った医師のニーズを満たすからである。研修医用の講義は入門の方向に、漢方カンファレンスは専門の方向にそれぞれ偏りすぎるが、本セミナーは様々な目的を持った先生方に気軽に参加・利用し、ディスカッションに加わってもらえる。またセミナーの症例発表の中からは、研究や学会発表の題材も生まれる可能性があり、漢方専門医制度の研修指導施設として専攻医を育てるゆりかごの役割も期待されるのである。無事に100回を迎えた本セミナーをほかの教育啓発活動と有機的に連携させながら、さらに本学のニーズに合った形で発展させていきたいと考えている。

## おわりに

このたび第100回を迎えた東京医科大学臨床漢方セミナーについて、開催の経緯やこれまでの概要、今後の展望等について述べた。この次は第150回や第200回臨床漢方セミナーの区切りに向け、内容や運営方法などのたゆまぬ見直し・改善を図りながら、末永く本学の皆様に愛されるセミナーを目指していきたい。講演などの依頼にもできる限り対応させていただく。読者諸氏の一層のご指導ご鞭撻をお願いする次第である。

## 利益相反

本論文に関する申告すべき利益相反はない